

第12回東京外語会ツアー 風薫る5月若葉のドイツ旅行記 (2007. 5. 24~6. 1)

都築秀之 (F昭36)

今回初めてこの旅行に参加したのは現役時代にロンドン、パリに駐在していたが、ドイツは会議でフランクフルトに数回出かけた以外は訪れた事がなく、ドイツ各地の観光名所や東西統一後のドイツ (特にベルリン) を一度この目で見たいと思ったからだ。

東京外語会のツアーは今年で12回目になるが、一国内の3支部との交歓会を行うのは今回が初めてのことだそう。

フランクフルトからベルリンへ

5月24日(木)成田空港に32名が集合。現地参加の板倉さん(D昭36、プラハ在住)、沼田さん(F昭44、パリ在住)を含めて34名はこの会始まって以来の最大の参加者数との事、最年長は元学長の鈴木幸壽先生(D昭18)だった。LH-711(ルフトハンザ)機は成田を9時55分に出発、定刻の14時30分頃フランクフルト空港に到着。気温は28度で快晴。空港からアウトバーンに乗り森の中を抜け、高層ビルが見えだしたら市の中心部に到着していた。ホテルにチェックインする前に旧市庁舎など古い建物に囲まれている「レーマー広場」に立ち寄りドイツビールを試飲した。フランクフルト支部との交歓会はホテル内のレストラン「クラシコ」で行われ最長老の羽根さん(D昭28)から最近のドイツの状況についてお話を伺った。8名の方が出席されたが羽根さん、寺井さん(D昭61)を除くとドイツ人と結婚された福田さん(D昭43)やドイツで研究又は仕事をされている方々で皆女性だった。金融関係の駐在員が多いだろうと予想していたので意外だった。この後訪れたデュッセルドルフ、ベルリンでも女性の同窓生が多く、女性が活躍する時代になったのだと痛感させられた。

25日はホテルを7時半に出発、リューデスハイムで、9時15分発の船に乗りこみライン河畔に沿って点在する町や、斜面の葡萄畑の背後に見える城壁や教会の塔などを眺めながら約2時間のライン下りを楽しんだ。快晴で河風もこちよく、絵に描いたようなライン河観光の一時だった。ローレライの岩を眺めて間もなく船はザンクト・ゴア

ハウゼンに到着、そこから再びバスに乗りライン河沿いにコブレンツや、ボンを経てケルンに向かった。ケルンはルール工業地帯の中心都市で人口も100万を超えているがローマ時代からの政治、交通、文化の要所でライン河畔に聳える「ケルン大聖堂」が有名だ。聖堂前ではデュッセルドルフ支部の三丁目さん(D昭37)に出迎えて頂いた。その夜のデュッセルドルフ支部との交歓会は「シューマッハ」というビール醸造所兼ピヤホールで行われ会長の森さん(Po昭54、全日空勤務)以下10名程の方々に迎えられた。この日はデュッセルドルフ東京外語会第63回例会を兼ねているとのことで、当地の外語会の伝統が感じられた。席上森会長から外語会本部宛の記念品が贈られ、また、会長の計らいで大阪外大卒の片岡氏が来賓として招かれ、訪問団中の咲耶会メンバーとの交流もあり、一同和やかな雰囲気の中で歓談した。無濾過の出来たてビールに白アスパラガス、アイスバイン(豚のもも肉を軟らかく茹でたもの)、ソーセージというドイツの典型的な料理を満喫した一夜だった。

ベルリン、ポツダム、ドレスデン

26日(土)8時30分発のLH-248でベルリンに向かった。ベルリンではガイドのノリスさん(イギリス人と結婚し20年独ベルリン在住の日本人女性)が出迎えてくれた。車中ノリスさんがベルリンの現状を簡単に紹介してくれたが、東西統一後首都に決まった1992年から10年余を掛けて首都機能の移転が行われ、今尚建設中の施設も多いとの事だった。その日も快晴で気温30度、三連休の初日の為かシュプレー河畔では大勢の人が日光浴をしていた。観光は「国会議事堂」前から。19世紀後半に建てられた重厚な建物の背後にはガラス張りのドームが増築されていた。続いて東西ドイツ統合の象徴の「ブランデンブルグ門」。そこから5分程の「ユダヤ人ホロコースト記念碑」が並ぶ広場には大きさ、高さが少しづつ違う長方形の石材(御影石のような)が並べられていてその間を自由に歩けるようになっていた。もの言わぬ墓石を眺めながらその悲劇に思いを致すという場所だ。ベルリン・コン

ツェルトハウス、ドイツドーム、フランスドームというクラシックな建物が並ぶ「ジャンダルメント広場」付近で昼食後、ベルリンから20Km程のポツダムへ。ポツダム宣言が行われた「ツェツエーリン宮殿」は湖のほとりの森の中にある皇帝の夏の館として建てられた英国風の建物だったが、ここで歴史の転換点となった会議があったと思うと感無量だった。ベルリンに戻って「ベルガモン博物館」（トルコや中近東のローマ時代の遺跡からの出土品が集められている博物館）を覗いてから官庁街近くの「キャビネット」というレストランでベルリン支部の皆さん（出席者全員が女性）と会食、ドイツ在住のフリージャーナリスト、永井潤子さん（D昭33）からメルケル政権の政策、ドイツ人の戦争責任観など数々の興味ある話題についてお話をお聞きし、近著『新首都ベルリンから』（未来社）を全員が頂いた。永井さんはNHKのラジオ深夜便のリポーターもされているとの事。

27日（日）はポツダムの「サンサーシー宮殿」（フリードリッヒ大王の夏の居城）を見学してからベルリンに戻りベルリン中央駅で昼食、その後ベルリンの壁（50m位が当時のまま残されている）を観たがその下に展示されたナチ政権13年間の記録写真がホロコーストの生々しい現場などを伝えていてショッキングだった。ベルリンを14時半頃出発しドレスデンに着いたのは17時半過ぎだった。プラハから参加した板倉さんとここでお別れした。

28日は10時まで自由行動、1945年2月の大空襲で破壊され、2005年に募金を集め、放置された瓦礫や壁のかげらを繋ぎ合せて復興された「聖母教会」や、王宮など古い建物の密集する一角、マイセン磁器の壁画「君主の行列」を覗いて、エルベ河畔を散歩した。そのあと宮殿内の「絵画館」などを見学したが、ザクセン王国の面影を留めたドレスデンはこの旅で一番印象深い場所だった。

ニュールンベルグ、ローテンブルグ、ハイデルベルグ

ドレスデンを出発してから雨が降り出し、夕方ニュールンベルグに着いた時は一段と寒くなり皮ジャンを着た人達を見かけるという変わりよう、持ってきた厚手の服の出番となった。夜は昔の建物が残る中央市場付近の店で名物のニュールンベルグソーセージを賞味した。

29日は終日雨。ニュールンベルグ城を外から眺めローテンブルグに向かったが、そこでは中世の面影を残す市庁舎と市議宴会場のあるマルクト広場、レストランの集まる石畳の路地や城門などを眺めただけで、ハイデルベルグへの道を急いだ。

30日は朝から晴れ、午前中は自由行動で数名の方々とネッカー河対岸の丘の中腹にある「哲学の道」を歩いた。ここはネッカー河とハイデルベルグの古い街並みを見晴らす絶好な場所だった。午後はハイデルベルグ城を訪れ、ルネッサンス、ゴシック、ロココ様式の混在する城郭、城壁、王の館などを覗いて回った。城のテラスから見たハイデルベルグの街並みとネッカー河はNHKの番組でも紹介された眺めだとの事だ。ネッカー河に架かる橋の上でハイデルベルグ城を背景に記念写真を撮った。その夜、マンハイムの「すし馨」ではご主人の越智さん（I昭34）が店の前に出迎えてくれた。マンドリンの先生をされた後退職されてこの店を開いたとの事、回転カウンターは平安時代の「曲水」に似て流れる水の上に小さな舟を浮かべその上に乗せた飯台から好みの寿司をとってゆくというしゃれたもので現地のお客さんも沢山来店していた。その晩は越智さんのおごりという事でお寿司も食べ放題、お酒も飲み放題の大打上げパーティーとなってドイツ民謡やキンキラ節まで飛び出す盛り上がりようだった。越智さん、有難うございました。



5月31日、パリに戻る沼田さん、尚旅を続ける鈴木先生はじめ6名の方々とフランクフルト空港でお別れした後15時50分発のルフトハンザ機に搭乗、6月1日7時45分に無事成田に着。

田中団長はじめこの旅を企画された幹事の方々に感謝したい。